

アムツル 魔女を追いかける

エリス・カウト作 松尾幸子訳



評論社の児童図書館・文学の部屋

商標登録番号 第730697号・第852070号 登録許可済

児童図書館
文学の部屋

プームックル, 魔女を追いかける

昭和52年3月20日 初版発行

¥ 980

訳 者 松 尾 幸 子

発 行 者 竹 下 晴 信

印刷所 三 倉 印 刷

製本所 株式会社 小林 製 本

発 行 所 株式 評 論 社
会 社

(〒101) 東京都千代田区神田神保町 2-16

電話代表 (265) 1 9 6 1

振替東京 8-7 2 9 4

検印省略

落丁・乱丁本は本社にてお取りかえいたします。

(A-1)

プ
ー
ム
ツ
ク
ル、
魔^ま女^{じょ}
を^を追^おい
か
け
る

エリス・カウト作

松^{まつ}尾^お幸^{さち}子^こ訳

さし絵・バーバラ・V・ジョンソン



PUMUCKL AUF HEXENJAGD

by

Ellis Kaut

Illustrated by Barbara von Johnson

Original German language edition published

by Herold Verlag Stuttgart

Copyright © 1969 by Herold Verlag Brück KG.,

Stuttgart S, Alexanderstraße 51

Japanese translation rights arranged with

Herold Verlag Stuttgart through Charles

E. Tuttle Co. Inc., Tokyo.

も
く
じ



プームツクル、魔女まじょを追おいかける……………11

プームツクル、火あそびをする……………47

かん違ちがい……………78

小さなベルベル……………101

プームツクルとニコラウス……………136

プ
ー
ム
ツ
ク
ル、
魔^ま女^{じょ}を^を追^おい
か
け
る



ある試みとその結果^{けっか}

みなさん

この頁^{ページ}に書いてあるものを読む必要はありません。ただ書いたというだけのものなので
すから。よいのです。というのは、結局のところ何に

も読めないことになるか、何かめっちゃめっちゃなものを読まされることになりそうだからで
す。これはどんな意味^{いみ}なのかって？ それはとてもかんたんなことです。つまりここ
で、ある プームックルは、わたくしたちがプームッ

クルについての本を作ろうとすると手出しをします。こんどはそれをさげたいと思いまし
た。それでわたくしたちはただ、 みせかけま
した。

みなさんもプームックルもよく知っている、プームックルの絵を、この頁のとなりに、はつきりと見えるようにおくことにしました。そして、何が起こるか待つことにしました。もしかすると、小さなコーボルト小人はここにはまったく姿を現わさず、わたくしたちはのんびりと、四さつ目の本を印さつすることができるかもしれません。しかし、もしかすると、プームックルはどこかにこっそりとかくれて待ちかまえていて、わたくしたちに、かもしれない。わたくしたちの目にはプームックルの姿が見えませんが、みなさんが知っているように、プームックルの姿は

——だから、この頁はただの試みにおいただけなのです。さてこれをこのまま

ほったらかしにしておきましょう。

プームックルは現われました！

どうかと思いませんか？ プームックルはここに現われて、そして手あたりしだいに何行かを——それはプームックルにとつてはただの線にすぎません、みなさんも知っているように、プームックルは字が読めないのですから——抜き出して、それで得意の、帆かけ船の絵を書きました。プームックルは時々、かべにこういう船をいたずら書きします。む

かしプームックルが初めて、そしてそれは、たった
いちどのこととなりましたが、学校に行ったとき
に、生徒たちの画用紙がようしにそのような船の絵を描いて
生徒たちをびっくりさせたことがありました。何し
るプームックルの姿は生徒たちの目には見えなかつ
たのですからね。しかし、こんど場合は、わたく
したちは、このいたずらにぜんぜん腹はらを立てません
でした。それどころかとても喜んだのです。ぜんぶ
をそのまま印刷いんさつすることにします。文章の中の、抜
けているところにあてはまるものを、さがし出して
読まなければなりません。この、プームックルの
帆かけ船を、みなさんもまた、おもしろがってくれ
ると思います。しかし、みなさんの中にこのことを
腹立たしく思う人があれば、そう、その場合にはこ
の帆かけ船をこわし、それぞれの行を切り取って、



抜けているところに正しくあてはめてゆけばよいでしょう。でも、そんなことをするのは、この、すてきな帆かけ船と、この、すてきな本のためにさんねんなことだと思ふなあ。

この帆かけ船の本の線／＼風田にもなるかのようにつ
試みをしようというのです。いつも
どの本にも、初めの頁においた線だ

／＼あり、／＼に何かが書かれていれば
川田の間にたずねるに違ひない

プームツクル、魔女^{まじょ}を追いかける

プームツクルはある点では、みなさんとかわりありません。つまり、プームツクルも胸がドキドキするような話をしてもらうのが好きでした。しかし、さんねんなことにエーダー親方もほかのおとなたちとあまりかわりがありませんでした。つまり、エーダー親方は話をするようなひまや気分をいつでも持っているというわけではなかったのです。すくなくとも、プームツクルがたいくつしているときにはそうでした。というのは——さんねんながら——プームツクルはエーダー^{おやか}親方が仕事をしなければならぬときにかぎって、いちばんたいくつしていたのでした。そこがむずかしいところでした。そしてそのことがまたきつそく、このややこしい話へとつながることになりました。

さて、プームツクルはとてみたいくつしていました。そこで、うーんと大きなあくびを

してみせました。仕事をしていたエーダー親方は目をちょっとあげて言いました。「すくなくとも口に手をあてろよ！」

プームックルはすなおに口に手をあてて、もういちどあくびをしてから言いました。

「口に手をあてたって、やっぱりたいくつだよ。」

「すこし、わたしの手伝いをしたらいい。」とエーダーは提案ていあんしました。「どうだい、その小さなほうきをとって、机つくえの下をはいてくれないか？」

プームックルはけいべつしたようにほうきの方を見て言いました。「もっともつと、ものすごくたいくつなことだな。」

「では詩しを作れよ。」とエーダーは言って、板切れにのこぎりをあてました。

「ぼくの頭の中には詩がぜんぜん入っていないんだよ。」プームックルはまたあくびをしました。

「じゃ、何が入っているんだい？」

「何にも。ぜんぜん、まったく何にも入っていないんだ。きのうの晩、中に入っていたものをぜんぶ夢にしちまったし、ぜんぶ出しつくしちまったんだよ、頭がからっぽになるまでね。」



のこぎりが、ガーガーとすごい音をたてながら板を切ってゆきました。その音に負けな
いたためには、エーダーは、ほとんどどなるように言わなければなりません。『で
は、教えてやれるのはただひとつだ、プームックル、頭に何か新しいものを入れるんだ
な。』

プームックルはいまはまた手をあてずにあくびをして言いました。『どこから、その『新
しいもの』をとってきたらいいの？ そこらじゅう、『古いもの』ばかりしかないのにさ。
たいくつなぶらんこ、たいくつな仕事場、たいくつな雨。』

エーダーは外を見ました。しとしとと雨が降り、栗くりの木の枝からたくさんの雨だれが、
ぼたぼた、したりおちていました。

「では、わたしにはどうすることもできないよ、プームックル。」

しばらくのあいだ、仕事場の中はしんと静まりかえっていました。とつぜん、プームッ
クルが叫さけびました。「ううん、だいじょうぶだよ！」

「そうかい？ どうするんだい？」

「あんたが何か新しいことを話してくればいいんだよ。そうしたらぼくの頭の中にも
また何か新しいものが入るだろ。そして、そうなれば、ぼくはもうたいくつじゃなくなる

さ！」そう言ってプームックルはねだりはじめました。「ねえ、何か話してよ、ねえ！」

エーダーは指で板の表面をなでてみながら言いました。「いったい何を話せばいいんだい——わたしだって新しいことなど何にもわからないよ。」

「だって、あんたは新聞を読んだろ。新聞には話がたぐさんのっているはずじゃないか。何かひとつ話してよ。」

「そんなことはないさ。おまえに話してやるようなことは何もない。政治には興味がないんだろ、殺人とか強盗とかいう悪いことについては、わたしのほうが話したくない。」

「人間はどんな悪いことをするの？」プームックルはゾクゾクするような話が聞きたくて目をきらきらさせながら言いました。「ああ、ねえ、ねえ、話してよ。」

「くだらないことさ。」とエーダーはぶつぶつ言いました。

「話さないと、またあくびを出すぞ！」プームックルはおどかすように言いました。しかしエーダーは平気でした。「じゃ、あくびを出せばいい。」と落ちつきはらって言いました。

プームックルはぴょんととびあがりました。「いやだ、あくびは出さない、ぼくが出る、出て行く、びしょびしょの雨の中に、だぞ！」